

全国大学書道学会 第67回 令和7年度（信州）大会 開催要項（第2次案内）

下記の要領で、全国大学書道学会 令和7年度（信州）大会を開催します。ふるってご参加いただきたく、ご案内申し上げます。

- 1) 主 催 全国大学書道学会
- 2) 開催大学 信州大学教育学部
- 3) 開催日 令和7（2025）年9月14日（日）
- 4) 大会会場 信州大学教育学部（〒380-8544 長野市西長野6-10） 図書館2階大講義室他
- 5) 参加費 3,000円 *当日受付にお持ちください。
*今回大会より
・研究発表者は無料
・準会員（大学院生）は無料
・会員の関係する大学の学生（学部生）の聴講も可
（聴講無料。但し、会員は、事務局宛に事前申請をすること）

6) 参加申込

下記フォームより9月1日（月）12:00までに事前申し込みをお願いします。
所属と氏名を書いた名札を名札ケース（各自ご用意ください）に入れてお持ちください。

[大会参加登録用 Google フォーム]

<https://forms.gle/Bb9dQT9h6TV2enpQ9>

必ず事前のお申し込みをお願いいたします。9月1日（月）12:00まで



こちらのQRコード
からも読み取れます

※入力された情報は本大会の運営にのみ使用いたします。

※フォームのお申込みが難しい場合、開催大学までメールもしくはFAX・はがきにて次の情報をお送りください。

・大会／懇親会の参加ご希望の旨、ご氏名、ご所属、メールアドレス、連絡がとれる電話番号。

7) 日 程

●9:00 受付（M館（管理校舎）玄関前）

●9:30～10:20 開会式・総会（会場：N101 教室）

[開会式]

1. 開会のことば
2. 開催大学あいさつ
3. 会長あいさつ
4. 理事長あいさつ

信州大学 小林 比出代 先生
横田 恭三（跡見学園女子大学名誉教授）
永由 徳夫（群馬大学）
[] ()

[総 会] *議長選出

5. 議事
(審議事項)

- 1) 令和6度事業報告
- 2) 令和6年度決算報告
- 3) 令和7年度監査報告
- 4) 役員改選について

事務局
会計局
監査
理事長

- | | |
|----------------------------|-------------|
| 5) 令和7年度事業計画(案) | 事務局 |
| 6) 令和7年度予算(案) | 会計局 |
| (報告事項) | |
| 1) 若手会員のための研究発表旅費補助規程 | 理事長 |
| 2) 国際学術交流専門委員会について | 国際学術交流専門委員会 |
| 3) 『大学書道研究』第18号について | 学術局・編集局 |
| 4) 『大学書道研究』のオープンアクセスについて | 編集局 |
| 5) 新潟研修「會津八一と良寛をめぐる研修」について | 企画局 |
| 6) その他 | |

*議長解任

[贈 賞]

6. 令和7年度 全国大学書道学会学会賞

- | | |
|-------------------|----------|
| 1) 令和7年度 選考結果について | 学会賞選考委員会 |
| 2) 贈 賞 | |

[その他]

7. その他

- | | |
|----------------|-------------------------------|
| 1) 新入会員紹介 | 事務局 |
| 2) 次年度開催大学あいさつ | [] () |
| 3) その他 | |

8. 閉会のことば

●10:30~12:10 研究発表／午前の部

第1分科会(会場:N101教室) 司会 佐々木 佑記(五島美術館)

10:30~11:00 研究発表 午前1-①

光明皇后筆「杜家立成雑書要略」にみられる筆線の割れ ―有芯筆の構造に着目して―
東京学芸大学教職大学院 小磯 明照

11:05~11:35 研究発表 午前1-②

寺子屋調査から見る手習いにおける書流の実態 ―江戸と上野国に着目して―
群馬大学教職大学院 山本 桜子

11:40~12:10 研究発表 午前1-③

貝原益軒の学書法に関する一考察 ―『心画軌範』と『和俗童子訓』との比較を中心に
群馬大学教授 永由 徳夫

●10:30~12:10 研究発表／午前の部

第2分科会(会場:N201教室) 司会 角田 勝久(新潟大学)

10:30~11:00 研究発表 午前2-①

唐代における刻者の集団に関する一考察 ―出身地と活動年代の分布に着目して―
東京学芸大学教職大学院 北嶋 栞菜

11:05~11:35 研究発表 午前2-②

印論における「補刀」概念の研究 ―「復刀」との比較を中心にして―
東京学芸大学教職大学院 毛塚 涼斗

11:40~12:10 研究発表 午前2-③

明治期女子教育における「習字」教育とジェンダー化された主体性の形成
川村学園女子大学非常勤講師 河島 由弥

●12:10～13:10 休 憩 (60分)

●13:10～14:15 研究発表／午後の部 (会場: 図書館2階大講義室) 司会 下田 章平 (相模女子大学)

13:10～13:40 研究発表 午後1-④

後漢時代中期における楷書系の様相 —長沙五一広場東漢簡牘を中心に—

安田女子大学講師 井田 明宏

13:45～14:15 研究発表 午後1-⑤

木村竹香編『羅漢印譜』の新たな視点による分析

新潟大学教授 岡村 浩

●14:15～14:30 休 憩 (15分)

●14:30～15:50 大会記念講演 (図書館2階大講義室) 司会: 永由 徳夫 (群馬大学)

演題: 古代における中国書法の将来と古代・中世の書蹟・名筆・扁額の伝来
—禁裏・公家文庫の歴史と収蔵史料画像の公開—

講師: 東京大学名誉教授、公益財団法人陽明文庫理事 田島 公 先生

—たじま いさお

1958年 長野県長野市生まれ。1977年 長野県長野高等学校卒業、1982年 京都大学文学部史学科国史学専攻卒業、1986年 京都大学大学院文学研究科博士後期課程国史学専攻中途退学。2024年 京都大学博士 (文学)。

1986年 宮内庁書陵部陵墓課陵墓調査室員、1991年 同編修課皇室制度調査室員、1996年 同主任研究官を経て、1997年 文部省に出向、東京大学史料編纂所助教授に配属。2006年 東京大学史料編纂所教授。2024年 同定年退職。

現在、東京大学名誉教授、公益財団法人陽明文庫理事、京都府立京都学・歴彩館京都学特任研究員、一般社団法人長野教育文化振興会顧問ほか。編著書に『蔵書目録からみた天皇家文庫史 —天皇家ゆかりの文庫・宝蔵の目録学的研究—』(塙書房、2024年)、『日本、中国・朝鮮対外交流史年表 —文武天皇元年 (六九七)～建久四年 (一一九三)—』(汲古書院、2025年)ほか多数。

●16:00 閉 会 閉会のことば

8) 学会誌への投稿

- 研究発表後に、学会誌へ投稿される場合には、連絡先を明記した別紙とともに、完成原稿 (3部) を 2026年2月2日 (月) (必着) までに学術局長宛に送付して下さい。

【原稿送付先】 〒252-0383 神奈川県相模原市南区文京2-1-1 相模女子大学10号館

全国大学書道学会 学術局長 下田 章平 宛

※必ず書留またはレターパック等の配達記録便を利用し、原稿及び別紙の連絡先 (氏名、郵便番号、住所、電話 (FAX) 番号、E-mail アドレス) を郵送して下さい。

- 大会における研究発表を経ずに、学会誌へ「論文」「その他の原稿」を投稿する場合は、2025年11月30日 (日) (必着) までに学術局長宛にそれぞれの原稿の要旨を送付して下さい。原稿の要旨は、本学会ホームページ上の「会員への情報」内にある「研究発表要旨」を使用して下さい。学術局内での審議、常任理事会での承認を経た上で、投稿の可否を連絡します。

【要旨送付先】 全国大学書道学会学術局長 下田 章平 宛 (s-shimoda@isc.sagami-wu.ac.jp)

9) 会員書作展

会員作品展を以下のように開催いたします。ふるってご参観ください。

- (1) 会 期 令和7年9月12日(金)～9月14日(日) 9:00～16:00
※12月19日(金)～12月22日(月) 信濃教育博物館(長野市)にて一般公開の予定
- (2) 会 場 信州大学教育学部 図書館2階ギャラリー

10) 理事会【オンライン開催】

日 時 9月7日(日) 19:00～20:30 ※理事の皆様には別途ご連絡いたします。

11) 三学会合同懇親会

三学会合同の懇親会を開催いたします。ふるってご参加下さい。

日 時 9月13日(土) 18:00～20:30

場 所 THE SAIHOKUKAN HOTEL (長野ホテル犀北館)

〒380-0838 長野県長野市県町528-1 Tel (026)235-3333 (代表)

会 費 7,000円

※会場となるホテルは、信州大学教育学部から500mほど(徒歩7分前後)の場所にあります。

希望者は、往路「教育学部→ホテル」、復路「ホテル→JR長野駅」のマイクロバス利用が可能です(無料)。

※懇親会での企画について、別添の資料をご参照ください。

12) 大会会場への交通・宿泊・昼食について

◎信州大学 長野(教育)キャンパスへのアクセス

①JR長野駅善光寺口1番のりばで、アルピコバス

「善光寺大門行(びんずる号)」 「善光寺経由宇木行」 「善光寺・西条経由若槻東条行」

「善光寺・若槻団地経由若槻東条行」のいずれかに乗車(10分)、バス停「花の小路」下車。(徒歩7分)

②JR長野駅善光寺口4番のりばで、中心市街地循環バス『ぐるりん号』に乗車(15分)、

バス停「信大教育学部前」下車。(徒歩2分)

③JR長野駅善光寺口7番のりばで、アルピコバス

「県道経由戸隠中社行」「鬼無里行」「西裾花台団地行」のいずれかに乗車(10分)、

バス停「信大教育学部前」下車。(徒歩2分)

◎宿泊について 宿泊先の紹介はしておりません。各自ご手配ください。

◎昼食について 昼食は各自ご手配ください。

※本大会は、ながの観光コンベンションビューローより支援をいただいておりますので、宿泊は極力長野市内でお願い致します。

13) 緊急時における対応について

緊急時(災害・感染拡大等)は、開催校との協議により大会を中止することがあります。その場合は、開催日前日の19:00までに全国大学書道学会ホームページ(<http://all-shodo.jp/>)にてお知らせいたします。

【お問合せ】 ・研究発表、学会に関するお問い合わせ

全国大学書道学会事務局(杉山勇人/鎌倉女子大学/sgym-hyt@kamakura-u.ac.jp/0467-33-8211)

・大会に関するお問い合わせ

開催大学担当(小林比出代/信州大学/E-mail: hideyokb@shinshu-u.ac.jp)

本学会と併せて、下記の学会が開催されます。(参加費は、それぞれ別扱いです)

日時、会場等は各学会から送付される開催要項をご参照ください。

日本教育大学協会全国書道教育部門 9月12日(金) 13:00～16:30

全国大学書写書道教育学会 9月13日(土) 9:30～16:30

アクセスマップ 【大会：信州大学 長野（教育）キャンパス】



- ①JR 長野駅善光寺口1番のりばで、アルピコバス
「善光寺大門行（びんずる号）」「善光寺経由宇木行」「善光寺・西条経由若槻東条行」
「善光寺・若槻団地経由若槻東条行」のいずれかに乗車（10分）、バス停「花の小路」下車。
（徒歩7分）
- ②JR 長野駅善光寺口4番のりばで中心市街地循環バス『ぐるりん号』に乗車（15分）、
バス停「信大教育学部前」下車。（徒歩2分）
- ③JR 長野駅善光寺口7番のりばで、アルピコバス
「県道経由戸隠中社行」「鬼無里行」「西裾花台団地行」のいずれかに乗車（10分）、
バス停「信大教育学部前」下車。（徒歩2分）

◎主要ターミナルからのアクセス



◎構内マップ



令和7年度 全国大学書道学会（信州）大会

研究発表要旨集

令和7年9月14日（日） 於.. 信州大学教育学部

研究発表 午前1—① 10:30 ～ 11:00

光明皇后筆「杜家立成雑書要略」にみられる筆線の割れ

—有芯筆の構造に着目して—

東京学芸大学教職大学院 小磯 明照

光明皇后筆「杜家立成雑書要略」(以下、「杜家立成」)には、一部の文字の筆画に、筆線に沿った割れがみられる。この筆線の割れは、「杜家立成」と同時期の他の作例にも散見され、当時使用されていた筆に起因するものと推測される。

この「杜家立成」にみられる筆線の割れは、日野楠雄他「正倉院宝物特別調査 筆調査報告」(『正倉院紀要』第四三号、宮内庁正倉院事務所、二〇二一年)においてはじめて指摘され、有芯筆(有心筆、紙巻筆、巻筆とも)の構造に起因して生じたものとの見解が示されている。さらに荒井利之は「正倉院所蔵の巻筆と書蹟」(同前)において、「杜家立成」にみられる筆線の割れに加え、筆線の割れに起因する横画の収筆、縦画からのほね、点などにみられる突起についても指摘している。しかしながら両者とも、この筆線の割れについてわずかな例を示しているのみで、「杜家立成」における筆線の割れの全体状況を把握するには至っていない。

そこで本研究では、「杜家立成」全一九紙、四一八七字を対象として、拡大図版を詳細に観察し、「杜家立成」にみられる筆線の割れについて調査・整理をおこなった。さらに確認された筆線の割れについて、有芯筆の構造と照らしながら分析・分類を試みた。その結果、全体の二〇%を超える文字に筆線の割れやそれに起因した痕跡が確認でき、先行研究では指摘されていなかった多種多様な筆線の割れの存在が確認された。

研究発表 午前1—② 11:05 ～ 11:35

寺子屋調査から見る手習いにおける書流の実態

—江戸と上野国に着目して—

群馬大学教職大学院 院生 山本 桜子

江戸時代には公用書体であった御家流が一般に流布していた。また、御家流は寺子屋の手習いにおいても用いられていた。一方で、御家流以外の和様の書流や唐様の書流を扱っていた寺子屋もあった。地域によっては、存在した寺子屋の調査が行われており、寺子屋の所在地や師匠については、どの調査でもまとめられている。しかし、書流については取り立てて調査を行っていないことが多い。書流の調査をしていない場合でも、師匠の伝記や往来物等から書流が何か判明することがあるが、書流が確認できた寺子屋はごく一部であった。また、調査は行われていたとしても、集計は行われておらず、どの書流がどれほど手習いで用いられていたのかについては明らかにしていない。

本研究では、御家流が広く用いられていた寺子屋での手習いは、江戸から離れた地域でも、同じような様相で行われていたのかを探り、江戸と地方の人々の書に対する受容の姿勢や手習いにおける書流の実態について明らかにしたい。地方について、上野国(群馬県)の寺子屋は、師匠が用いていた書流が何であったのか寺子屋毎に調査されており、書流の集計が可能であった。そのため、江戸の寺子屋と上野国の寺子屋の調査資料や教育史資料などから見られる書流や往来物の記録を基に、寺子屋の手習いで用いられていた書流について調査を行っていく。

研究発表 午前1—③ 11:40 ~ 12:10

貝原益軒の学書法に関する一考察

—『心画軌範』と『和俗童子訓』との比較を中心に—

群馬大学教授 永由 徳夫

江戸時代の本草学者・儒学者である貝原益軒（一六三〇—一七一四）は、博覧強記で知られ、経学・医学・歴史・地理・教育等、多分野で先駆的業績を挙げている。啓蒙書の一つに『和俗童子訓』（一七一〇刊）があるが、本書はわが国初の体系的教育書と評される。学書法についても述べており、巻四「手習ひの法」では初学者向けに手習ひの方法を平易に説いている。主として真字（漢字）・和字（仮名）ともに古典に学ぶこと、初学者は大字楷書から習うことを説くが、これらは今日の書写書道教育でも一般に行われているものである。行書が日用の書体として通行していた時代にあつて、益軒はいかにして斯様な理論を唱えるに至ったのであろうか。

刊行年は前後するが、益軒が『和俗童子訓』に先んじて書学の要諦をまとめた一書に『心画軌範』（一七一二刊）がある。『和俗童子訓』の中で「予かつて諸書の内をかんがへ、からの筆法の諸説をあつめて一書をあらはせり。心画軌範と名づく一冊あり」と述べていることから明らかである。書論・書法・書評の三部から成る『心画軌範』は、種々雑多な中国書論を取り混ぜたもので、益軒の見解はなく、実用に遠いものと見なされているようである。だが、中国書論の中から抽出した一条一条には、益軒の書道観が見て取れるのではあるまいか。本発表では、『心画軌範』と『和俗童子訓』とを比較対照しながら益軒の書道観構築の過程を考察し、その提唱するところの学書法が今日の書写書道教育の礎となっていることを明らかにしたい。

研究発表 午前2—① 10:30 ~ 11:00

唐代における刻者の集団に関する一考察

—出身地と活動年代の分布に着目して—

東京学芸大学教職大学院 北嶋 葉菜

書道史上、数多くの碑や墓誌、帖などに文字が刻され、後世に伝えられてきた。我々が現在目にする書の古典には、肉筆の他、石や木、金属などに刻された文字を拓本という形で伝えたものが多くあり、その過程には書者に加えて刻者が存在しているのは言うまでもない。刻者に着目した研究に、澤田雅弘氏の『晚唐「劉遵礼墓誌」「劉中礼墓誌」における邵建初—鐫刻における記名刻者の関わり—』など、墓誌に見られる刻者ごとの刻法の差異に注目したものがある。また、程章燦氏『石刻工研究』や田熹晶氏『唐代石刻工考略』のように、その身分や出身地域に関する考察を行ったものもある。これらの先行研究の内容のうち、特に興味深いのは、唐代以降、次第に刻者が集団化し、のちに工房も見られるようになる点である。しかし、刻者の集団に関する問題について、これまで体系的になされた研究は見当たらない。そこで、本発表では、この集団化が見られるようになった唐代に焦点を当て、刻者の集団についてその特徴や年代ごとの変遷を明らかにすることを目的とする。

本発表では、刻者の署名が残る唐代の碑や墓誌を対象とし、署名内容・出身地・活動年代を整理して分析する。特に、その出身地と活動年代の分布に着目し、山地の出身者の比率が高いことや活動年代に一定の偏りが見られることを示した上で、唐代における刻者やその集団の特徴を明らかにする。

印論における「補刀」概念の研究

―「復刀」との比較を中心にして―

東京学芸大学教職大学院 毛塚 涼斗

本研究は、韓天衡編訂『歴代印学論文選』（西泠印社出版社、二〇〇五年）及び黄惇編著『中国印論類編』（榮宝齋出版社、二〇一〇年）に記載されている印論から「補刀」の語を抽出し、その変遷や論述を比較・分析することを通して、「補刀」概念の定義を明らかにする。次に、「補刀」と類似する「復刀」（二刀で刻せなければ再度繰り返し刻す刀法（許容「説篆」）等の刀法との比較を通して、共通点と相違点を明らかにする。

「押印したら印影を確認し、彫り残しがあれば修正する。」（A社書道I検定済教科書）から分かるように、「補刀」は印面・印影の不十分な箇所を修正する作業として位置づけられてきた。しかし、姚晏「再統三十五挙」には、「補刀は、短い長い太い細いのを均一に整える」とあり、単なる修正する作業に留まらず、作品全体の完成度や調和を追究する刀法の重要な概念であることが示唆される。

これまで、韋佳「明清篆刻刀法理論的論述特点及意義」（『書画芸術学刊』第二〇期、二〇一六年）等の刀法の分類を整理した研究は見られるが、個別の刀法について、焦点を当てた研究は見られない。

そこで、本研究では、「補刀」が単なる印面・印影の不十分な箇所を修正する作業ではなく、作品の完成度や調和を追究し高める要素を含んだ独立した刀法であることを明確にし、その定義を明らかにしたい。

明治期女子教育における「習字」教育とジェンダー化された主体性の形成

川村学園女子大学非常勤講師 河島 由弥

本発表は、近代日本における「習字」教育が、ジェンダー化された主観性の形成にいかなる機能を果たしたのか、その具体的な「作用機序」を、教育思想と実践の分析から解明する。そして、公的イデオロギーや教育制度史といった既存研究では十分に光が当てられてこなかった、「習字」教育を通じてジェンダー規範が内面化されるプロセスを明らかにすることで、近代女子教育史およびジェンダー史研究に新たな知見を提供することを目指す。

分析は、まず「習字」が実用技能から「良妻賢母」的な徳性涵養の教科へと変容した過程を跡づける。その上で、明治期女子教育を主導した下田歌子と跡見花蹊の比較を通じて、主観性形成の作用機序が、それぞれの教育理念に基づき、いかに異なっていたかを検証する。

下田は、外面的な「形」（姿勢・書字）の美しさが内面的な「徳性」と不可分であると説き、社会的規範に適合する品位ある女性の育成を目指した。対照的に跡見は、「書は心の印」という思想に基づき、表層的な「女々しさ」を退け、内面的な「精神的強靱さ」の陶冶を追求することで、教養に裏打ちされた自律的な主体の育成を試みた。

この二つの異なるアプローチの解明は、「習字」という教育実践が、近代の「女性らしさ」をめぐる複数の理念を体現させる、多機能的な教育として機能していた一面を浮かび上がらせるだろう。

研究発表 午後1—④ 13:10 ~ 13:40

後漢時代中期における楷書系の様相

—長沙五一広場東漢簡牘を中心に—

安田女子大学講師 井田 明宏

楷書の萌芽とその時期に対する検討は、新出土資料の発見と共に見直され続けてきた。現在、後漢時代中期の書写である長沙五一広場東漢簡牘（以下、五一広場簡）中に見られる例が最も早いとされている。しかし、楷書の萌芽に関する研究の多くが、ごく少数の簡牘に注目し、その書法に対する言及に終始しているため、楷書の萌芽段階のものがいかに使用されていたか、その定型化がいつの段階でどこまで進んでいたかなど、総合的な指摘をするには至っていない。また、後漢時代中期に関しては、公開された資料が限られていたことから、十分な検討が行えない状況にあった。

近年、五一広場簡は図版の公開が進展し、現時点で約五〇〇〇枚の簡牘が見られるようになった。これは楷書の萌芽を考える上での僥倖と言える。本発表では五一広場簡の新公開資料に注目し、書法に対する総合的な検討を加えた上で、後漢時代中期における楷書の実相について試案を提示したい。なお、本発表では楷書の萌芽段階を「楷書系」と呼ぶこととする。

五一広場簡には君教牘という上行文書が多く確認でき、その多くが楷書系で書写されている。これは楷書系が君教牘を作成する際の主な書体として定型化していた可能性を示唆するものであり、その実態を明らかにすることは、楷書の萌芽を考察する上で、重要な知見をもたらすだろう。

研究発表 午後1—⑤ 13:45 ~ 14:15

木村竹香編『羅漢印譜』の新たな視点による分析

新潟大学教授 岡村 浩

本発表で取り上げる木村竹香（一八六八～一九四三）は、新潟市内の印刷業者である。一時上京して岡本椿處（初世椿所）に就き、業を磨いた。帰郷後の新潟は、当時「舟江」と称す湊町として活気のある地で、中から来越した書画文芸家の名流も多く含まれていた。

明治三十六（一九〇三）年、篆刻家で墨竹画讃作を得意とした山田寒山（一八五六～一九一八）が来越。この時、竹香は寒山に十六羅漢を鈕に象った陶印を依頼した。後日、それを「羅漢印譜」と名付け上梓した。

本印譜の特色だが、従来寒山畢生の作と刻調を讃えられる他方、二冊を仔細に窺うと全国各地の貴顕の士や文人が詩書画篆刻を寄せ、地方に在住した一人の所業としては、その内容の豊かさに感嘆する。

本研究ではこの『羅漢印譜』の印技というよりも、余り知られない多彩な文人の諸作に注視したい。幸い発表者は、この印譜が上梓されるまでの過程を垣間見る資料に接することが叶った。『羅漢印譜』と比べると、編集の意図が理解できる。編集過程の分析から気付くことは、○中央と地方文化の密接な結びつき○中央のみならず、地元で文芸の名家が育っていた越後の土壌○近代出版業を考察する好資料であること。上記三点に触れつつ結論としては、竹香を通して近代地方文人の生業の一端をまとめつつ、関連事項として子息・正平（のちの山田正平）の歩みはこの親ありてこそといった観点からの竹香像にも言及したい。